

東京アマテウス合唱団
第22回定期演奏会

<アルブレヒツベルガー&ラインベルガー>



Tokyo Amateus Chorus

2003年11月3日(月・祝)
ルーテル市ヶ谷センター

「指揮者からのメッセージ」

小さな合唱団へ

小さなアマチュア合唱団は演奏技術、財務運営、その他あらゆる活動面で多くの苦勞を強いられます。団員一人一人へかかる負担も大きくなります。東京アマデウス合唱団もそんな状況の下で頑張って定期的に演奏会を開いてきた合唱団です。団員の努力と熱意に心から敬意を表します。

つくづく感じますのは、人と人が結び合いながら一つの活動を続けていくのは容易でないということです。人の性として消し去ることが難しいエゴイズムをコントロールし、寛恕、思いやり、手助け、奉仕、義務といった行いを多く為すこと。

昨今、世界中に渦巻くグローバル化の中で、熾烈さを増している競争第一主義、勝ち組負け組に分別する原理とは正反対の行き方が、真に組織を生かし人を生かす、これは合唱団ばかりでなく、あらゆる団体活動にいえることだと思います。そんな意味で私には合唱団という場が、人生に於ける、人間性を養う為の修練所のようにも思われます。

差し出がましくなってしまうました。失礼と思いつつも、少人数で頑張っている東京アマデウス合唱団と、日本中の全ての同じような小合唱団への励ましのメッセージの意を籠めさせていただきます。お赦しを願う次第です。

(指導・指揮 水野克彦)

「水野先生が現在指導している主な合唱団」

渋谷混声合唱団 東京クリスマス・オラトリオ・アカデミー
東京三菱銀行合唱団 女声合唱団アンサンブル・フローラ
東京アマデウス合唱団 等



ご 挨拶

本日は、お忙しい中をご来場頂き、団員一同厚くお礼申し上げます。

東京アマデウス合唱団は1980年創立以来、ほぼ毎年1回の定期演奏会を行い、22回目の定期演奏会を迎えることとなりました。

今回は、「ラインベルガー」作曲の「スタバトマーテル」を、本来のパイプオルガンの伴奏で演奏したいという団員の希望を実現するため、これをメインの曲とし、「ベルガー」(山)という名前に因んで、ラインベルガーより100年前の「アルブレヒツベルガー」の作品を加えてプログラムを組み、更に、ドイツ語圏の作曲者でもあるため、ラテン語のドイツ式発音にも挑戦してみました。

本日は、すべてパイプオルガンの伴奏で演奏するほか、水野克彦先生のオルガンソロを加えた豪華なプログラムとなりましたことを、団員一同大変嬉しく思っております。

また、水野先生の懇切な御指導と堀江和子さんのパイプオルガンの伴奏に助けられ、さらには毎回遠くからわざわざご来場頂きます皆様方からの暖かいご支援にも支えられ、少人数ながらも演奏会を開催出来ますことを、団員一同心から感謝いたしております。

団員の一人一人も精一杯の力を出し切って今回のコンサートを成功させたいと思っておりますので、100年を隔てた2人の名作曲家の異なった雰囲気や味わいを、ゆっくりとお楽しみ頂ければ幸いです。

(東京アマデウス合唱団 団長 柿 沼 哲)



❖❖❖ The Program ❖❖❖

第1ステージ Johann Georg Albrechtsberger (1736~1809)



(オルガン)

1. Praeludium in D op. 12-2

(合 唱)

2. Ave regina coelorum (ようこそ、天の女王さま)

3. Missa in D (ミサ 二長調)

————— (休 憩) —————

第2ステージ Josef Gabriel Rheinberger (1839~1901)



(オルガン)

4. Meditationen op. 167より Preludio

(合 唱)

5. Fünf Hymnen, (五つの神への讃歌)

1. Tribulationes (私の心の苦悩が広がっています)

2. Dexter a Domini (主の右の手は力ある御わざを為される)

3. Eripe me (私を私の難から解き放ってください)

4. Ave regina coelorum (ようこそ、天の女王さま)

5. Angelis suis (神は御使いたちに命じられた)

(オルガン)

6. Meditationen op. 167より Canzonetta

(合 唱)

7. Stabat Mater, in g op. 138

(悲しむ御母は行んで居られた)



指揮・パイプオルガン独奏

水野克彦



東京芸術大学卒業。

ピアノを滝崎鎮代子、クラリネットを千葉国夫、室内楽を細野孝興の各氏に師事。オルガンの手ほどきを今井奈緒子氏に受ける。芸大バッハ・カンタータ・クラブに在籍中、小林道夫氏の薫陶を受ける。

日本オルガニスト協会会員。

伴奏 パイプオルガン

堀江和子（兼、練習ピアニスト）



武蔵野音楽大学短期大学部ピアノ科卒業。

キリスト教音楽学校パイプオルガン科卒業。同研究科程修了。

ピアノを水本雄三、野村文子、オルガンを高橋靖子の各氏に師事。

現在、茗荷谷キリスト教会オルガニスト・聖歌隊伴奏者。

日本オルガン研究会会員。

ソリスト バリトン

松原 友



大阪府出身。大阪府立夕陽丘高校音楽科在学中に第51回全国学生音楽コンクール（毎日新聞社主催）全国大会第1位。2002年に東京芸術大学を卒業し、現在同大学院2年在学中。三林輝夫に師事。

ドイツリートをピアニストの小林道夫に師事し、氏と共に多数の演奏会に出演。オペラでは「魔笛」、「ヘンゼルとグレーテル」、「ジャンニ・スキッキ」、「メリー・ウイドウ」等出演。

2002年湯布院音楽祭、清里音楽祭に出演。

東京アマテウス合唱団

Sop 辻村順子・村松あおい・吉川ゆかり

Alt 伊藤正子・大久保ルミ子・大友美佐・小川由美子・宮崎米子

Ten 小沢 仁・片岡 繁・古澤忠久

Bas 柿沼 哲・野口 碩

§ 演奏曲目について §

今回の演奏曲目の二人の作曲者は、一方はオーストリアのウィーンの郊外に生まれて生涯の大半を国王継承戦争後のウィーンで過ごし、晩年は宮廷オルガニストとウィーン最高の教会の座を占める聖シュテファン大聖堂の楽長として生涯を終え、ヨーゼフ・ハイドンとほぼ同時代を生きた前期古典派の前期ウィーン学派に属するのに対して、他方はオーストリアとスイスに挟まれた、ドイツ語を公用語とする小さな公国に生まれ、ほぼ百年後のロマン派の時代をドイツのミュンヘンで過ごし、晩年はバイエルンの宮廷楽長として生涯を終えたという面では、時代的にも地理的にも隔たりがある。しかし、二人は大きな共通性がある。すなわち、激動と啓蒙主義の時代に在りながらどちらもカトリック教会音楽と宮廷音楽に深く関わり、教会オルガニストとして鍵盤音楽に精通し、教会音楽として作曲される声楽曲の作品にもオルガン奏者の感覚が常に働いて居り、何よりも作曲法の教師として最も尊敬され、その作品が作曲の模範として時代の人々にその穏健性が受け容れられていた事である。したがって、ベートーヴェンやワーグナーのような新時代を切り開く創造性は無かったが、替りに中世及びバロック以来の音楽の伝統を基礎に、緻密さと技術の点で、そして精神面で、当時の理想を作曲に反映し得ていた。

Johann Georg Albrechtsberger (1736-1809)

◇ Praeludium 二長調 作品12の2

1802年から翌年に掛けて、Stephansdom (聖シュテファン大聖堂) の楽長の任務に在ったアルブレヒツベルガーが大聖堂のミサのために作曲したオルガンまたはピアノフォルテのための前奏曲6曲をまとめた自筆譜資料 (オーストリア国立図書館蔵) の第2曲に含まれているもので、構成はアダージョで前半の上昇形を描いて高潮していくフレーズと、後半のそれを転調させながら、ヴァリエーションとして下降形を描くフレーズとの二部形式の曲である。

◇ Ave Regina coelorum 口短調

アルブレヒツベルガーは1736年2月3日ウィーン近郊Klosterneuburgで生れ、七歳のとき地元のアウグスチノ修道会の少年聖歌隊員になり、そこでLeopold Pittnerからオルガンと通奏低音を学び、G. M. Monnに作曲を学んだ。更にメルク大修道院のMarian Gurtler, Joseph Weissに作曲法とオルガン奏法の訓練を受け、ウィーンのエイズス会神学校に学んだのち、方々の教会のオルガニストを務め、1772年からカルメル会の教会 (後の聖ヨーゼフ教会) の聖歌隊指導者、1773年から宮廷礼拝堂のオルガニストとして奉職した。この曲はブタペストのSzéchényi国立図書館に自筆譜が保存されていて、四曲のAve Reginaがセットになっている。第二曲ト短調、第一曲ヘ短調、第四曲口短調の順に綴じられていて、第三曲は紛失している。今回演奏するのは第四曲である。

このセットの自筆譜の最初のページに「1773」と記入された数字が四曲の成立年月と考えられている。グレゴリオ聖歌の習慣から2月2日に行われる聖母マリア御浄めの祝日から聖木曜日の終課までの間に使われたか、或は降誕節の晩課のために作られたと考えられるオルガン伴奏付のアンティフォーナである。〈Regina coelorum天の女王様〉〈Gaude Virgo gloriosaお喜びください、誉れ高き処女よ〉〈Vale, o valde decoraお健やかに、おお何ともすばらしい処女よ〉がホモリズムで歌われて荘厳さが強調されるほかは、すべてフーガの技法を駆使し、終結部の〈et pro nobis Christum exora 私たちのためにキリストを懇願して得られて下さい〉では二つの主題を持つ二重フーガが展開される。この作曲者がフーガの作曲に没頭し始めた時期を反映して、最も充実した作品の一つと評価が高い。

◇Messe(ミサ曲)二長調

この曲も1791年Stephansdomの副楽長に友人モーツァルトの後任として就任する前の宮廷礼拝堂のオルガニストとカルメル会の教会の聖歌隊指揮者を兼務した時代の作品で、作品は同じくSzéchenyi国立図書館に保存されている自筆譜末尾のラテン語のメモによると1783年10月であり、オルガン伴奏付きのア・カペラ風に書かれた作品である。三十五曲あるミサ曲作品の第21番として作曲者自身の作成した目録に載っている。Kyrieは荘厳に〈Kyrie eleison〉をモノフォニックに歌い出したあと、すぐに二重フーガに移る。このフーガをAgnus Dei後半〈Dona nobis pacem〉で主題を変形させながら再び展開させている。Gloriaは和声を持つ二組の旋律を呈示しては応答させる形、一つのパートに歌い出しを先行させて他のパートにポリフォニックに模倣させる形を見せながら、全体としてソナタ風にまとめている。その和声はこの曲の注目される点で、変化に富み、意外性が十分にある。Credoはこれも同じく一つのパートに歌い出しを先行させて他のパートにポリフォニックに模倣させる形を基本にしながら、〈Et incarnatus est〉の部分はモノフォニックな部分を際立たせて、信仰告白の最も重要な部分である受肉されたキリストが私達の罪のために十字架に掛かれた事を告白する部分が浮き彫りになるように、構成されている。〈Et resurrexit〉以下はフーガ風に、或は一つのパートに歌い出しを先行させてポリフォニックにそれを追う形を守りながら主題を展開させ、終結部を構成している。SanctusとBenedictusもフーガ風に、或は上に述べて来た先唱付のポリフォニーで構成される。Sanctusの〈Gloria tua〉をこの基本形を使いながらスキップするように歌うのは、バッハの口短調ミサの影響かも知れない。Agnus Deiも冒頭部のあと直ちに先唱付のポリフォニーの形で前半部分が展開し、〈Dona nobis pacem〉は前述のフーガと終結部から成り、カデンツァも先唱付のポリフォニーで終わる。

アルブレヒツベルガーは、この曲を作曲後1793年Stephansdomの楽長に昇任、1809年3月7日死去まで勤めた。彼はその卓越したオルガン演奏の腕前とともに対位法に精通していたことが時代の人々に高い評価を受け、大勢の人々から教を請われることになった。1794年から95年にかけてベートーヴェンが彼からフーガなどの作曲法を学んだ事はよく知られている。

Josef Gabriel Rheinberger (1839-1901)

◇Meditationen 作品167より Preludio 変ホ長調

ラインベルガーはすぐれたオルガン奏者であるとともにオルガン音楽の作曲家としてロマン派の時代を形成した重要な存在の一人であった。その存在が再発見されたのは1960年代である。交響曲や弦楽室内楽の作品も少なくないが、特筆すべきそのオルガン作品は教会の礼拝と深く関わりながらも伝統から大きく変容し、ソナタ、ファンタジー・ソナタ、パストラール・ソナタなどに本領を発揮した。このカトリックの黙想を音楽で表現した瞑想組曲もその片鱗を窺わせる作品である。この曲は《Zwölf Orgelvorträge 12のオルガン演奏》と題する副題を持つ、1891年11月から12月にかけて作曲された組曲（1892年出版）の第5曲で、壮麗なマエストーソを展開する。冒頭の主題が後半で再現されたあとのコーダはセザール・フランクなど新ドイツ楽派の手法を試みている。

◇Fünf Hymnen (五つの賛歌) 作品140

ラインベルガーは1839年3月17日リヒテンシュタイン公国のVerdutzで君主に仕える財務官を父として生まれた。5歳の時からSebastian Pöhliの厳しいオルガンのレッスンを受け、7歳の時にはVerdutzの教会のオルガニストに成り、オルガン伴奏付の三声ミサを書いて翌年発表するなど、早熟な才能を披露した。1851年からミュンヘン音楽院で理論、オルガン、ピアノを学び、在学中から作曲を熱心に手がけるようになり、1859年に作品1のピアノ曲を発表する。以後彼はピアノ曲よりむしろオルガン曲の重要な作曲家として知られるようになる。同じ年彼は聖Michael教会のオルガニストに就任し、1866年まで務め、1864年から1877年までミュンヘン合唱協会の指揮者を務め、宮廷オペラの指揮も担当した。1867年再開された音楽院でオルガンと作曲を教えるように成り、1877年にバイエルンの宮廷楽長に就任して、1884年にはベルリン王立アカデミーの会員に推された。1901年これらを辞職して間もなく、11月25日に死去した。1884年バイエルンで作曲したのが、この作品140である。Hymneはカトリックの聖務日課用の賛歌を意味している。

第1曲Tribulationesは苦悩からの解放と罪の赦しを哀願する歌詞を歌うもので、四句節の第2主日の昇階唱として歌われる典礼聖歌の歌詞を使用しているが、曲の歌い出しもグレゴリオ聖歌の原曲を参考にしているが、曲の構成は三部形式になっていて<Tribulationes>以下前半の歌詞が後半を歌い終わった後もう一度繰り返される。哀願する言葉には音符に強調記号が付いている。

第2曲Dextera Dominiは詩編118から第16、17節を引用して信頼と献身を歌うもので、第1主日に朗唱される詩編（典礼では詩編117）の一部分を歌詞に用いている。ロマン派らしく強弱の効果を取り入れ、主への信頼、生命、献身の告白を時には力強く、かつ陰影深く歌いおさめる。

第3曲 Eripe meは受難週の聖月曜日に歌われる奉献唱の歌詞を使ったもので、迫害と試練のなかから真実の神である主への帰依を告白して救済を求めている。<inimicis meis私の敵ども>は信仰を妨げる、神の御意を行なわせまいとする精神的社会的誘惑を指す。歌詞の部分部分が各自モチーフを担いながら哀願の感情の高まりを盛り上げ、<Eripe me: quia Deus meus es tu. 私を解き放って下さい、私の神様はあなただからです>というフレーズが繰り返される。

第4曲 Ave reginaはアルブレヒツベルガーの作品と対照させて聴くことができる。この曲も受難週の聖木曜日の終課に歌われた可能性がある。懇願や強調すべき内容を示す歌詞の音符にアクセント記号が付く傾向はこの曲でも同じである。

第5曲 Angelis suisは四旬節の第1主日の昇階唱の歌詞を使っている。バリトンのソロがアリア風に先唱し、合唱が対位法を駆使してポリフォニックに答唱する構成を守っている。

◇ Meditationen 作品167より Canzonetta 変口長調 Preludioと同じ小曲集の第3曲で、主題から展開へ、そして再現、コーダへとソナタ風に展開する右手、左手、足鍵盤が三重奏するように構成された舞曲風のメロディックな曲である。変口長調で書かれているのが珍しい。

◇ Stabat Mater ト短調 作品138 Stabat Mater 作品16をすでに作っているラインベルガーが後期に再び作曲したこの曲は表現性にあふれて居り、彼がやはりロマン派に属することを強く感じさせる。歌詞は1306年に没したJacopone da Todiの作と伝えられたが、現在は13世紀にフランスで生まれたとするのが定説。15世紀に続唱sequentiaとして典礼の中に取り入れられ、9月15日の聖母の七つの悲しみの祝日と受難の主日後の金曜日の聖処女マリアの七つの御苦しみのミサに歌われる。グレゴリオ聖歌では全体が20節に分けられ、同じ旋律を1節ごとに繰り返すが、この曲は1-4節、5-8節、9-14節、15-17節に18、19節を別の歌詞に改めて付け、終結部20節を添えた四部に分けられている。各部分は互いに共通するフレーズがモチーフを共有し合いながら展開して居るにも拘らず、全く趣の違う内容に成っている。マリアの悲痛な苦しみ、御子の十字架上の苦しみを語る部分は下降旋律で表され、歎息や剣が心を刺し貫くという表現や御子が魂を手放される部分などにすべてアクセントが置かれ、叙述や告白の強い感情を伴った強調はフォルテで、悲しみや試練の語りはピアノでと、強烈な表現性をつくり出そうとしている。重い旋律はやがて安らぎへと変わり、更にほのかな喜びへと転じ、終結部ではフーガで明確な喜びの信仰的帰依へと変わり、死後の世界で魂に天国の誉れが与えられるように祈り求める歌詞は、<paradisi gloria>に一瞬受難の下降形のモチーフをかいま見せながら収束する。つまり、殉教的死に対して天国の誉れが与えられるようにという音楽表現なのである。

(文責 野口 碩)

東京アマデウス合唱団のご案内

(平成15年11月現在)

今回ご来場の皆様方の中には、すでにご存知の方々も多いかと思いますが、東京アマデウス合唱団を初めてお聴きになる方々のために、若干のご案内をさせて頂きたいと思っております。

東京アマデウス合唱団は、1980年に「モーツァルトのレクイエム」を自分達の手で演奏したいという夢を持つ、アマチュアの仲間達が集まって創立しました。

以来、モーツァルトのほか古典派の作品を中心とした宗教曲を、ほぼ毎年1回の定期演奏会で演奏してまいりました。

今年で23周年を迎えましたが、その間に演奏した曲の主なものを後のページに掲載しておりますのでご一読下さい。

この合唱団は、指導者の招聘・指揮者の選定・会場設定・演奏会の曲目選定・プログラム印刷・演奏する曲目の解説から訳詞に至るまで全てが団員の労力と団員だけの資金で成り立っており、手作りの演奏会を開催するユニークな合唱団としての存在価値を、団員一同が誇りとしております。

創立当初は68名いた団員も現在は15名程度になりましたが、なんとか存続させたいという団員の強い意志に支えられて、現在に至っております。

今後の活動予定は次ページの通りですが、一緒に唄ってみたい方や興味のある方がおられましたら、是非とも練習会場にお出かけ頂いて練習状況をご覧頂きたい(見学大歓迎)と願っております。

次ページ及び下記ホームページをご参照の上、是非ご来場頂きたく団員一同心からお待ちしております。

[ホームページ]

<http://homepage2.nifty.com/Amadeus/>

今後の活動予定

2004年11月3日(水・祝) 予定
 第23回定期演奏会 聖アンセルモ目黒教会(予定)
 演奏曲目

パレストリーナ : Alma redemptoris Mater
 : Regina Coeli
 モンテヴェルディ : Missa a quattro voci
 da cappella
 D. スカルラッチィ : Iste Confessor
 : Te gloriosus
 : Laetatus sum

参加・見学ご希望の方へ

お問い合わせ先

辻村 順子 048-476-4056
 大久保ルミ子 03-3960-7714

練習日 毎週水曜日 午後6時半～9時

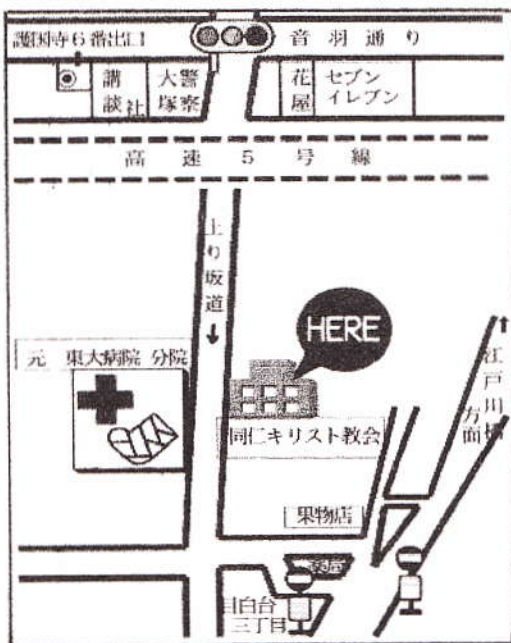
練習会場 同仁キリスト教会美登里幼稚園2F

地下鉄有楽町線「護国寺」駅下車(6番出口)徒歩5分
 JR山手線目白駅より「都バス椿山荘または新宿西口行き」で
 目白台三丁目下車 徒歩3分

指導者 水野克彦

会費 月額 4千円(学生2千円)

練習場所案内図



	開催年月	主な演奏曲目
第1回	81. 2	モーツァルト(レクイエム)ジュズ7代
第2回	81.11	ヘンデル(メサイア)
第3回	82.11	フォーレ(レクイエム)
第4回	83. 9	モーツァルト(戴冠式ミサ)
第5回	84. 9	モーツァルト(レクイエム)ジュズ7代
第6回	85.10	バッハ(カンタータ 106)
第7回	86.10	モーツァルト(グロッセ・ミサ)
第8回	87.10	シュッツ(ムジカリッシュ・エクゼクイエン)
第9回	88.12	モーツァルト(ヴェスベレ)
第10回	89.11	モーツァルト(レクイエム)ジュズ7代
新年祝	90. 5	ジョスカン・デ・ブレ(ルヴェ・ラング)
第11回	91. 2	モーツァルト(リタニア)
第12回	91.11	モーツァルト(ドミニクス・ミサ)
第13回	92.11	シャルパンティエ(真夜中のミサ)
第14回	93.11	モーツァルト(ミサ・プレヴィス 275)
15周年	94.11	モーツァルト(レクイエム)ジュズ7代
第15回	95.10	バッハ(カンタータ 182)
第16回	96.11	モーツァルト(ヴェスベレ)
第17回	97.10	モーツァルト(ミサ・ソレムニス)
第18回	98.10	バッハ(カンタータ 61)
第19回	99.10	ラインベルガー(スタバト・マーテル)
新年祝	00. 7	ハスラー&メンデルスゾーン等
クリスマス	00.12	四つのアヴェマリア等
第20回	01.11	モーツァルト(トリニターティス・ミサ)
第21回	02.10	ドイツ・バロック(J. C. F. Bach等)
第22回	03.11	ラインベルガー(スタバト・マーテル)



歌 詞 対 訳

Johann Georg Albrechtsberger

Ave Regina coelorum □短調

Missa 二長調

Josef Gabriel Rheinberger

Fünf Hymnen 作品140

Stabat Mater 卜短調 作品138

Tokyo Amadeus Chorus

(文責 野口 碩)

第1部
(オルガン演奏)

Praeludium 二長調 作品12の2 Johann Georg Albrechtsberger 作曲

(オルガン付き四声合唱)

Ave Regina coelorum 口短調 Johann Georg Albrechtsberger 作曲
(Ave Regina 自筆集 第4曲 1773年から)

Ave Regina coelorum. ようこそ、諸々の天の女王さま。
Ave Domina angelorum. ようこそ、御使達の支配者であられるお方。
Salve Radix, 清い光のさす源であられるお方、お救いください。
salve porta, ex qua mundo lux est orta. その光を放つ門であられるお方、お救いください。
Gaude Virgo gloriosa. お喜びください、誉れを得られた処女(おとめ)。
Super omnes speciosa: すべてのものに超えて美しいお方、
Vale, o valde decora, お健やかに、おお何ともすばらしい処女よ。
et pro nobis Christum exora. 私達のためにキリストを懇願して得られてください。

(オルガン付き四声合唱)

Missa 二長調 Johann Georg Albrechtsberger 作曲 (1783)

1. Kyrie

(等人とソプラノ)

Kyrie eleison. <Κυrie eleison.> 主よ、お憐れみください。
Christe eleison. <Χριστε eleison.> キリストよ、お憐れみください。
Kyrie eleison. <Κυrie eleison.> 主よ、お憐れみください。

2. Gloria

(グレゴリオ聖歌による先唱)

[Gloria in excelsis Deo.]

(主題の対位法的反復と先唱風の呈示付きソプラノ)

Et in terra pax hominibus bonae voluntatis. そしてこの世では善意の人々に平和がありますように。
Laudamus te, あなたを誉め称えます。
benedicimus te, あなたを祝福します。
adoramus te, あなたを崇めます。
glorificamus te. あなたの栄光を称えます。
Gratias agimus tibi あなたに感謝します、
propter magnam gloriam tuam. あなたの大なる栄光のゆえに。
Domine Deus, Rex caelestis, 神であられる主よ、天の王よ、
Deus Pater omnipotens. 全能の御父であられる神さま。
Domine Fili unigenite, 御ひとり子であられる主よ、
Jesu Christe. イエス・キリストよ。
Domine Deus, Agnus Dei, Filius Patris. 神であられる主よ、神の小羊よ、御父の御子よ。
Qui tollis peccata mundi, miserere nobis. 世の罪を除くお方、私達を憐れんで下さい。
Qui tollis peccata mundi, 世の罪を除くお方、
suscipe deprecationem nostram. 私達の赦しの願いを受け入れて下さい。
Qui sedes ad dexteram Patris, miserere nobis. 御父の右に座って居られるお方よ、私達をお憐れみください。
Quoniam tu solus, tu Sanctus, あなたは唯一のお方であり、あなたは聖なるお方であり、
tu Dominus, Altissimus, Jesu Christe. あなたは主であり、いと高きお方、イエス・キリストだからです。
Cum Sancto Spiritu, in gloria Dei Patris. 御父である神の栄光のうちに居られる御聖霊とともに。
Amen. アーメン(真実に)。

3. Credo

(グレゴリオ聖歌による先唱)

[Credo in unum Deum,]

(先唱風の呈示とソプラノによる答唱の形式)

Patrem omnipotentem, 全能の御父を、
factorem caeli et terrae, 天と地の造り主を、
visibilium omnium, et invisibilium. 全ての見えるものと見えないものの造り主を信じます。
Et in unum Dominum Jesum Christum, そして唯一の主イエス・キリストを、
Filius Dei unigenitum. ひとり子の神の御子を信じます。
Et ex Patre natum ante omnia saecula. 御父からよろず世の前に生まれたお方を信じます。
Deum de Deo, lumen de lumine, 神から出た神を、光から出た光を、
Deum verum de Deo vero. まことの神から出たまことの神を信じます。
Genitum, non factum, 造られずして生まれたお方を、
consubstantiali Patri: 御父と一体であられるお方を信じます、
per quem omnia facta sunt. 全てのものはそのお方によって造られたからです。
Qui propter nos homines, そのお方が私たち人類のために、
et propter nostram salutem 私たちの救いのために、
descendit de caelis. 天から降りて来られるのです。
Et incarnatus est de Spiritu Sancto そして処女マリアから生まれ出て聖霊によって受肉され、
ex Maria Virgine: Et homo factus est. 人と成られました。
(先唱風の呈示付きソプラノのソプラノによる器楽部分)
Crucifixus etiam pro nobis: 私達のために十字架にさえ掛けられました。
sub Pontio Pilato passus, et sepultus est. 即ち、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受けて葬られました。
(フグッタで終るアレグロ)
Et resurrexit tertia die, そして三日目によみがえられました、
secundum Scripturas. 聖書に従って。
(先唱風の呈示付きソプラノ)
Et ascendit in caelum: そして天に昇られ、
sedet ad dexteram Patris. 御父の右に座して居られます。
Et iterum venturus est cum gloria, そして栄光とともに再び来られ、

judicare vivos et mortuos:
cujus regni non erit finis.
Et in Spiritum Sanctum Dominum
et vivificantem:
qui ex Patre Filioque procedit.
qui cum Patre et Filio simul adoratur,
et conglorificatur:
qui locutus est per Prophetas.
Et unam sanctam catholicam
et apostolicam Ecclesiam.
Confiteor unum baptisma
in remissionem peccatorum.
Et exspecto resurrectionem mortuorum.
Et vitam venturi saeculi.
Amen.

4. Sanctus

(ホモリズムのアダージョ)

Sanctus, Sanctus, Sanctus Dominus Deus Sabaoth. 聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主なる神。

(先唱付き風のリズムをずらせたホリフオーネー)

Pleni sunt caeli, et terra gloria tua.

生けるものと死せるものを裁かれるのです。
だから、そのお方の王権の支配は止むことが無いでしょう。
そして主であられ、
命を与えてくださる御聖霊を信じます。
それは御父から御子にも顕れておいでになる。
それは御父と御子と一しょに崇められ、
賛えられる。
それは預言者達によって告げられていた事です。
そして唯一の聖なる公教の、
且つ使徒継承の教会を信じます。
唯一のバプテスマを認めます、
罪の赦しのときの。
そして死せる者のよみがえりを望みます。
そして来たらんとする世の命をも望みます。
アメン。

(フグッタのアレグロ)

Hosanna in excelsis.

あなたの栄光が天にも地にも満ちています。

いと高き所にホサナ(讃).

5. Benedictus

(フガトで始まり、先唱付き風のホリフオーネーへ移る)

Benedictus qui venit in nomine Domini.

ほむべきかな、主の御名によりて来たる者よ。

(フグッタのSanctusと同じ主題による比較的緩やかなアレグロ)

Hosanna in excelsis.

いと高き所にホサナ。

6. Agnus Dei

(先唱付き風のホリフオーネーを含むアダージョ)

Agnus Dei, qui tollis peccata mundi:

miserere nobis.

世の罪を除かれる神の小羊よ。

Agnus Dei, qui tollis peccata mundi:

(フガのヴァイヴァーチェ)

dona nobis pacem.

私たちが憐れんでください。

世の罪を除かれる神の小羊よ。

私たちに平安をお与えください。

第2部

(オルガン演奏)

Meditation 作品167よりPreludio Josef Gabriel Rheinberger 軸

(オルガン付き四声合唱)

Fünf Hymnen (五つの賛歌) 作品140 Josef Gabriel Rheinberger 軸

1. Tribulationes (1884)

(三部形式)

Tribulationes cordis mei dilatatae sunt:

de necessitatibus meis eripe me, Domine.

Vide humilitatem meam, et laborem meum:

et dimitte omnia peccata mea.

Tribulationes cordis mei dilatatae sunt:

de necessitatibus meis eripe me, Domine.

私の心の苦悩が広がっています。

いろいろな窮迫した事情から私を解放してください、主よ。

私のへりくだった姿、労苦する姿をご覧ください、

すべての私の罪をお赦しください。

私の心の苦悩が広がっています。

いろいろな窮迫した事情から私を解放してください、主よ。

2. Dexter a Domini (讃118.16-17)

(フグッタを模ったホリフオーネー)

Dexter a Domini fecit virtutem,

dexter a Domini exaltavit me:

non moriar, sed vivam,

et narrabo opera Domini.

主の右の手は力ある御わざを為される。

主の右の手は私を高くしてくださった。

死ぬことなく、生きながらえて、

主の御業を語り伝えよう。

3. Eri pe me (1884)

(先唱風の呈示とホリフオーネーによる合唱の形式を含む主題と変奏)

Eri pe me de inimicis meis, Domine:

ad te confugi,

doce me facere voluntatem tuam.

Eri pe me: quia Deus meus es tu.

Ad te confugi,

doce me facere voluntatem tuam:

quia Deus meus es tu.

Eri pe me: quia Deus meus es tu.

私を自分の敵から解放してください、主よ。

あなたの御許に身を避けるとき、

あなたの御意を行なう事を教えてください。

私を(敵から)奪い取ってください。私の神様はあなただからです。

あなたの御許に身を避けるとき、

御意を行なう事を私に教えてください。

私の神様はあなただからです。

私を奪い取ってください。私の神様はあなただからです。

4. Ave regina

(フグッタを模ったホリフオーネー)

Ave regina coelorum,

ave Domina angelorum,

salve radix,

salve porta, ex qua mundo lux est orta,

regina coelorum, o gaude gloriosa,

super omnes speciosa:

ようこそ、もろもろの天の女王さま。

ようこそ、御使達の支配者であられるお方。

清い光のさす源であられるお方、お救いください。

その光を放つ門であられるお方、お救いください。

天の女王さま、おお、お喜び下さい、誉を得られたお方。

すべてのものに超えて美しいお方。

salve, o valde decora
et pro nobis Christum exora,
ave regina caelorum.

お救いください、おお何ともすばらしいお方、
私達のためにキリストをお願いして得られてください、
ようこそ、天の女王さま。

5. Angeli suis (1884)

(バロンの独唱のソプラノの先唱に対して合唱が唱え、後半は先行する合唱を独唱がオブリガート風に導く)

Angelis suis Deus mandavit de te,
ut custodiant te in omnibus viis tuis.
In manibus portabunt te,
ne unquam offendas ad lapidem pedem tuum.
Angelis suis Deus mandavit de te,
ut custodiant te custodiant,
in manibus portabunt te,
ne unquam offendas ad lapidem pedem tuum.
Angelis suis Deus mandavit de te,
ut custodiant te.

神は御使達にあなたの事について命じられた、
必ずその行く道であなたを護れと。
手であなたを持ち運び、
決してあなたの足を石につまずかせるな、と。
神は御使達にあなたの事について命じられた、
必ず護れ、あなたを護れ、
あなたを手を持ち運び、
決してあなたの足を石につまずかせるな、と。
神は御使いたちにあなたの事について命じられた、
必ずあなたを護れ、と。

(オルガン演奏)

Meditation 作品167より Canzonetta Josef Gabriel Rheinberger 作曲

(オルガン併用四声合唱)

Stabat Mater ト短調 作品138 Josef Gabriel Rheinberger 作曲

1. Stabat Mater dolorosa

(テノールとバスとのユニゾンによる歌い出しの呈示に続いて十字架の傍らにたまたむ聖母の悲しみを水平的に重く語り進めながら、感情の高まりを下降旋律で盛り上げる)

Stabat Mater dolorosa,
juxta crucem lacrimosa,
dum pendebat filius.
Cujus animam gementem, contristatam et dolentem
pertransiit gladius.
O quam tristis et afflicta fuit
illa benedicta mater unigeniti!
Quae maerebat et dolebat, pia mater,
dum videbat nati poenas inclyti.

悲しむ御母はいつまでも佇んで居られた、
十字架のすぐ傍らに涙に暮れて、
御子の架かられている間。
彼女の歎息する、黯然として悲しむ、悩める魂は
剣が貫いたよう。
ああ、どんなに悲しみ、打ち砕かれたことか、
あの祝福されたひとり子の御母が!
彼女は嘆き悲しみ、苦しんで居られた、誠実な御母よ、
周囲の人目に曝された息子が苦しみを受けるのを見つめる間。

2. Quis est homo

(オルガンの序奏に続き、聖母の悲しみの眼差しへの同情を添える柔らかな語りかけとフォルテによる強調、ピアノニッサによるキリストの死への共感)

Quis est homo qui non fleret,
matrem Christi si videret in tanto supplicio?
Quis non posset contristari,
Christi matrem contemplari dolentem cum filio?
Pro peccatis suae gentis,
vidit Jesum in tormentis,
et flagellis subditum.
Vidit suum dulcem natum morientem desolatum,
dum emisit spiritum.

誰か悲しまなかつた者があろうか、
これほど痛切にひざまづいて祈るキリストの御母を見たら?
誰か黯然とさせられないで居ようか、
キリストの御母が御子とともに苦しむのをつぶさに見るのは?
御自分の民の罪のために、
イエスさまが拷問の責め苦と
答の下に服すのを見て居られた。
愛する我が息子が見捨てられ、死んで行くのを見て居られた、
魂を手放されたとき。

3. Eja Mater fons amoris

(テノールとバスとのユニゾンによる歌い出しの呈示に続いて、キリストとの連帯の意志の訴えが吹奏風に変わる)

Eja mater, fons amoris,
me sentire vim doloris fac,
ut tecum lugeam.
Fac, ut ardeat cor meum in amando Christum Deum,
ut sibi complaceream.
Sancta mater, istud agas,
crucifixi fige plagas cordi meo valide.
Tui nati vulnerati,
tam dignati pro me pati,
poenas mecum divide.
Fac me tecum pie flere,
crucifixo condolere,
donec ego vixero.
Juxta crucem tecum stare
et me tibi sociare in planctu desidero.

さあ、愛の泉であられる御母よ、
私に痛みがどれほどであるかを感じさせ、
あなたとともに悲しませてください。
私の心を、神キリストを愛して燃えるようにして下さい、
そのお方の御心にかなうように。
聖なる御母よ、このような者をも導いて、
十字架に打ち付けた傷跡を私の心にしっかり刻んで下さい。
あなたの御子の、傷つけられ、
これ程まで私のために耐えようとされた
苦しみを、私と分かってください。
私をあなたといっしょに愛情を込めて泣き、
十字架につけられた事に苦痛を覚えさせてください、
私の生きている限り。
十字架の傍らにあなたと立ち、
どうしてもあなたといっしょに声をあげて泣きたいのです。

4. Virgo virginum praeclara

(オルガン演奏のあと四声のユニゾンで歌われる)

Virgo virginum praeclara,
mihi jam non sis amara:
fac me tecum plangere.
Fac, ut portem Christi mortem,
passionis fac consortem et plagas recolere.

処女のうちでもすぐれた処女よ、
もはや私について疎ましく思わないでください。
私をあなたといっしょに声をあげて泣かせてください。
キリストの死を帯びるために、
御受難の連帯者となし、打ち傷を覚えさせてください。

(メモリアムのポリフォニー)

Fac me plagis vulnerari,
fac me cruce inebriari, et cruore Filii.
Inflamatus et accensus perte,
virgo, sim defensus in die iudicii.

私に打ち傷を負わせてください、
十字架と御子の血で私を酔わせてください。
あなたのために火をかけられ、焼かれたとき、
処女よ、あなたによって護られていますように、審判の日に。

(柔らかなワグナーの部分)

Fac me cruce custodiri,
morte Christi praemuniri,
confoveri gratia.

私を十字架によって護られるようにしてください、
キリストの死で前途を防いでいただき、
寵愛によって慈しみを受けるようにしてください。

(明るい賛曲ワグナー)

Quando corpus morietur,
fac, ut animae donetur paradisi gloria.

肉体が死ぬとき、
魂に天国の誉れが与えられるようにしてください。